

翻訳

『マルブランシュ選集』より

「罪と情欲」「感覚的認識」「マルブランシュの思想的位置」

藤 江 泰 男

まえがき

『マルブランシュ選集』としての今回の翻訳は、彼の宗教的な立場が素朴に表明されている二つの項目を選択している。すなわち「罪と情欲」と「感覚的認識」である。アルキエの解説部分についてはすでに訳出しているので、興味のある向きは生活社会科学科紀要『社会と情報』をご参照いただきたい。

ところで、ここで「情欲」と訳した *concupiscence* は、人間の「原罪」にかかわる「邪欲」をまずは意味する語であるが、本稿では幾分一般化して、情欲という訳語を当てている。本来罪を犯す必要のない状態で生まれたアダムが何故に罪を犯すにいたったのか、また、アダムという個人の罪である原罪が、何故にそれ以降の人間にあまねく伝播したのか、という素朴にして根底的な疑問にマルブランシュが答えている箇所を訳出している。また「感覚的認識」と題した項目では、われわれの感覚に自然に内在した判断、誤ることも正しいこともありうる、われわれに自然的にそなわっている判断につ

いて論じており、そうした判断のうちに、マルブランシュはむしろ神の働きを認め、それを「自然的判断」と称している。それは、「われわれのうちで、われわれ抜きで、われわれの意向にかかわらず」なされる判断のことであり、われわれの自然な振る舞い、自然な感覚的判断のなかに神の働きかけが認められる、と彼は理解するのである。

このように、自然の営みこそがまさに神の現われであり、自然こそが最大の奇蹟である、というマルブランシュの原理的立場が、明瞭に提示され展開されている文章を訳出している。じっくりと味わっていただければ、訳者としてはこれに過ぎる幸せはない。

さらに、後世から見たマルブランシュのイメージを、「マルブランシュの思想的位置」という項目でいくつか抜粋して訳出している。マルブランシュの思想的位置の大きさ・偉大さが、おのずと浮かび出ることを期待しての配置である。

マルブランシュ選集

・罪と情欲

罪は神の計画の一部をなす

神は罪を許容した。どうしてであろうか。それは、何らかの仕方
で修復された彼の作品は最初に造られたままの同一の作品よりも価値がある、ということを経験したからである。田園地方に霜や霰の被害を与えかねないような一般法則を、彼は確立した。また、
獐猛な野獣たち、さらには極めて不都合な無数の動物たちを、彼は創造した。なぜだろうか。それは、彼が罪を見つけたからである。
こうしたすべての作品のあいだに、無数の素晴らしい関係を神は設定したのである。彼は〈イエス・キリスト〉と彼の〈教会〉を幾多の仕方
で表現した。それは彼の予知力と知恵との結果であり、その確実な
しるしである。したがって、神がその予知力を活用したこと、そして最初から、物理的なものと精神的なものとを賢明に組み合わせ
たことを、それも、最初の人間がその無垢さを維持するのに必要
なわずかばかりの期間だけではなく、最初の人間に対して、並びに
彼のすべての子供たちに対して、彼らの成り行きを世の終わりにい
たるまで見通してそうしたことを、悪くとも欲しない。動物た
ちが、そのボスに対するように、自分には相応しい敬意を払いなが
らも、お互いには食い合っている、とアダムは不平をならすことは
許されない。むしろ彼は、そうしたことによって、それが理性をも

たない畜生だけのことであり、あらゆる被造物のなかから神はアダムを見分けていた、と理解すべきだったのである。

(『形而上学対話』 XI、11)

神のみが未来〈世界〉の美と完全性との栄光のすべてを所有すべきであつた。この作品、他のあらゆるものを無限に超出するこの作品は、まったくの憐れみの産物であるべきであつた。〈イエス・キリスト〉の恩寵が被造物に付与したもの以外の持ち分に与えることに、
彼らは栄誉を感じずべきではなかつた。要するに、あらゆる人間を罪のうちに墮ちるように神が放置したのは、彼らすべてに対して〈イエス・キリスト〉の憐れみを示すために適當であつた、ということである。

(『自然と恩寵の論』 第一話、34)

アダムの状態

原罪以前、自らの身体の反乱が精神のうちに生み出した盲目状態と混乱とが生じる以前、人間は、理性の光によって明晰に認識していた、ということを知らねばならない。さらに、

1 神のみが彼のうちに働きかけることができ、快樂ないし苦痛によって、彼を幸福にしたり不幸にしたりすることができる、要するに、彼を變えないし刺激することができ、ということを知らねばならない。

2 神は、同一の状況ではいつも同一の仕方では彼を刺激する、と

彼は経験によって知っていた。

3 したがって、理性によってと同様に経験によっても、神の振る舞いが一樣であり、一樣であるべきである、と彼は認めていた。

4 かくして、一般法則の機会原因をなす諸存在があるべきであり、その機会原因に則して、神が彼に働きかけるのを十分に実感できる、と信じるように彼は促された。というのも、もう一度言うならば、彼に働きかけるのは神のみである、と彼はよく知っていたからである。

5 彼は、そう望むときに、感覚的対象の作用を感じなくすることができた。

6 自分自身の意志について、およびこれらの対象の恭しく従順な作用について彼のもつ内的感覚は、それ故、それら〔感覚的対象〕は彼に従属しているのだから彼より劣っている、ということを経験に教えていた。というのも、そうあるとき、すべてが完全に秩序のうちにあるからである。

7 かくして、諸対象を機会として刺激される彼の感覚に結合した明晰な観念を参照することで彼は、この観念が表象するのは物体だけであるから、それらは物体にすぎない、と明晰に見ていたのである。

8 したがって、神が彼を刺激するさまざまな感覚は、彼が身体をもち、いくつかの他の身体・物体に取り巻かれている、ということを経験に教えてくれる啓示に他ならない、という結論を彼は引き出したのである。

（『形而上学対話』VI-7）

かくして、最初の人間は、自分の慈悲^{シャリテ}の力によって、生来の正義のうちに堅固にとどまることができたので、先行的快樂によって神が彼の注意をその義務へと向ける必要はなかった。克服すべき情欲をもたないのだから、神はその人間の自由意志に恩寵の悦びを先行させる必要がなかった。要するに、報酬に値する一切のものを彼はあまねく保持しているのだから、神は、不必要なことは一切しない神は、その人の墮落を予見しているにしろ、彼をあるがままに放置すべきであった。彼を（イエス・キリスト）のうちに引き上げ、自由意志を打ち砕き、その憐れみの輝きが現れることを神は望んでいたのだから。

（『自然と恩寵の論』第一話、35）

神は人間の精神と身体とを造り、その作品の保存のために、身体のうちにある種の運動が生じるときにはいつも、魂のうちにある種の感覚が帰結するように、と望んだのである。もともとそれは、こうした運動が脳のある部分（この部分について、私はここではこれ以上限定しないが）にまで伝えられる限りでのことではあるが。しかし、神の意志は効果的であるのだから、それが何についてであれ、脳のこの部分に運動が生起していて、何らかの感覚によってその人が刺激されていない、ということは決してあり得ない。そして、神の意志は不変的であるのだから、その意志が最初の人間の罪

によつて変化する、ということもなかったのである。しかしながら、罪を犯す以前、すべてのことが完璧にうまく調整されていた時期には、精神が自ら欲することを思惟しようとしても身体がそれを妨げるのであれば、それは正しいことではないのだから、人間はきつと身体に対して次のような能力をもっていたはずである。つまり、大脳の主要部分を、その他の身体部分からいけば引き離し、真理に、ないしは身体的善と異なる何か他のものに精神を集中したいと思つたときはいつでも、感覚に通じる諸神経と大脳との通常の伝達作用を妨げるような能力をきつともつていたはずである。われわれが多大の精神的努力をなすとき、しかも感覚的対象の印象がきわめて軽微なものであるとき、われわれは自身のうちにこの能力のいくらかの残存をいまでも実感できる。というのも、瞑想の力によつて、いま私が語っている大脳の主要部分にまでこうした印象が伝達されるのを、われわれは妨げるからである。かくしてアダムは、まず、身体の保存に有用なものを見分けるのに食欲を活用ができたし、次いで、食欲も快楽もなしに食べ続けることもできた。可感的な善の享受において彼が感じる快楽は、彼の諸欲求に抗する抗力^{レジスタンス}となることは決してなかったからである。すなわち、その快楽は、身体的善のためになすべきことへの敬意をもつて、彼に警告するのみであつた。したがつて、アダムはその欲するところを思考していたのであり、眠つてるときでさえその精神は目覚めていた、と言ふことができよう。というのも、要するに、原初的な正義の状態にあつて、もつとも賛美すべき神の作品のなかで、精神が身体に従属すること以上に甚だ

しい無秩序があるとは思えないからである。以上述べたところが、まさに自然の機構のあり方である。

（『キリスト教的会話』Ⅱ）

アダムはいかにして罪を犯すことができたか

ところで、最初の人間がいかにして罪を犯すことができたか、ということ以下に述べておこう。快楽を愛し、それを享受するのは自然なことである。そして、それはアダムに禁じられてはいなかった。喜びについても同様である。自分の自然的な完全性を見ることが喜びを感じることはありうる。それはそれ自体では悪いことではない。人間は幸福であるべく造られており、現実には幸福に満足感を与えるのは快楽と喜びである。したがつて、最初の人間は、可感的な善の享受に際して快楽を味わっていたのである。また自分の完全性を見ることに喜びも感じていた。というのは、それについて喜びを感じることはなしには、自分を幸福ないし完全であると見なすことはできないからである。しかし、同じような快楽をその義務を果たす際に感じることはなかった。というのも、神が自身の善であるということとを彼が認識しているにしても、私がこれまで何箇所かで証明したように、そのことを感じることはなかったからである。かくして、彼が義務の履行に際して見いだすことのできた喜びは、強烈に可感的なものではなかった。こうしたことを前提にすると、最初の人間は無限の精神的能力をもっているわけではないのだから、その快楽ないし喜びは、彼の精神の明晰な視力を、つまり、神が彼

の善であり、彼の喜びと快樂との唯一の原因であり、神以外を愛すべきではないということを彼に認識させる、精神の明晰な視力を弱めたのである。というのは、快樂は魂のうちにあり、魂を変容させるからである。したがって、その快樂は、われわれの心に触れ・われわれを動かす割合に応じて、われわれの思惟する能力を満たすことになる。こうしたことは、われわれが経験によって、ないしはわれわれ自身についての内的感覚によって理解する事柄である。したがって最初の人間は、その精神の能力を少しずつ分割されたり、傲慢な喜びの激しい感覚によって、あるいは恐らく何らかの愛情や可感的な快樂によつて、その精神の能力を満たされたりして、神の現前と自分の義務を思惟することがその精神から消し去られ、眞の善を求めて果敢に進んでゆくことをないがしろにしたのである。かくして、注意がそがれ、躓きが可能となる。というのも、彼の主要な現実的恩寵は、その光であつたし、あるいはその義務の明晰な認識であつたからである。現在われわれにとつて情欲に抗するのに不可欠の先行的喜びを、彼はその当時必要としていなかったのだから。

（『真理探究』第八解明、8）

情欲

何よりも人々の注意を喚起したいのは、いまなお人間たちは、彼らの最初の両親のもつていた痕跡と印銘とを大脳のうちに保持しているということが多いにありうる、ということである。というのも、動物たちが自分たちと類似したものを、しかも、その大脳には類似

した形跡を伴つて産み出すように（そして、その大脳こそが、同一種の動物が同一の共感および同一の反感をもつこと、そして同一の状況では同一の行動をとるといふことの原因をなすのであるが）、それと同様に、われわれの最初の両親も、彼らが罪を犯したあとで、感覚的対象の印銘によつてその大脳のうちにあまりに大きな形跡とあまりに深い痕跡とを受け取つたのだから、それらを彼らの子供たちに伝えたであろうからである。したがって、われわれが母の胎内にあるときからもっているあらゆる可感的なものへのこの大きな執着と、こうした状況にあるわれわれの、神からのこの大きな隔たりとは、われわれがいま述べたことによつて、それなりに説明できるように思われる。

というのは、確立した自然の秩序によつて、魂の思惟は大脳のうちにある痕跡に対応することが必然的であるから、母の胎内においてわれわれが形成されるやいなや、その時点からすでに、われわれは感官の快樂へときわめて強く執着しているがゆえに罪のうちにあり、両親の腐敗に汚染されている、と言われうるからである。われわれに存在を与えてくれた人たちと類似した痕跡を、われわれは自らの大脳のうちにもつているので、必然的に、われわれもまた彼らと同じ考えをもち、感覚的対象に対する同じ傾向性をもつことになる。

かくして、われわれは情欲を伴つて、そして原罪を伴つて生まれることとなる。情欲とは可感的なものに魂を執着させる牽引力に他ならないのであれば、われわれは情欲を伴つて生まれる他ない。そ

して、原罪が情欲の支配に他ならない、子供の精神と心情を打ち負かし統制するこうした牽引力に他ならないとすれば、われわれは原罪のうちに生まれる他ないのである。ところで、情欲の支配ないし情欲の勝利とは、どう考えても、子供における原罪、そして自由な人間における現実の原罪と称されるもののように思われる。

この二つの真理、つまり、第一に、原罪が伝播するのは身体を介してであり、魂は生成しないということ、第二に、身体が魂に働きかけ汚染することができるのは、魂の思惟が自然的に依存している大脳の一部の痕跡によつてのみであるということ、以上二つの真理に真摯に注意を向けるとすれば、いま説明したばかりのやり方で原罪が伝播することを、人は納得するだろうと私は思う。

（『真理探究』第二巻、第一部、第七章・第五節）

・感覚的認識

感覚の機能

松明に火が灯されるや、あるいは太陽が昇るやいなや、それはあらゆる方角に光を発し、あるいはむしろ、あらゆる方角に周囲の物質を圧迫する……。かくして、目を開けるや、物体の表面を反射する光の全光線、そして瞳から侵入する光の全光線は、眼球の液体のうちで屈折したのち視神経に沿って一本化するし……。さらにこの神経の振動は、魂が緊密に結合している大脳のこの部分にまで伝達される。そのことから、心身結合の法則の帰結として、われわれは

諸対象の現前について警告される、ということになる。というのは、物体はそれ自体では不可視的であるにしろ、そうした物体を機会としてわれわれがわれわれのうちにもつ、しかもわれわれの意向に反してさえもつ色彩の感覚が、われわれがそれらを見ている、ということとわれわれに説得するからである。われわれのうちにおける神の作用は、なんら可視的ではないのだから。そして、色彩はわれわれの心に軽く触れるだけであるので、それをわれわれに属する感覚と見なさず、われわれはそれらを対象に帰属させるのである。かくして、諸対象が存在する、それらは白と黒である、ないしは赤と青である、とわれわれは判断する、要するに、そのようなものとしてわれわれはそれらを見ている、と判断するのである。

対象の反射する光の差異が、圧迫する振動数の量的差異にすぎないにしろ、しかしながら、この振動ないし光の変容に対応する色彩の感覚は、本質的な差異をはらんでおり、この手段によつて、われわれはより容易に諸対象を相互に区別するのである。

かくして、空間ないし延長の觀念のうちにわれわれが見いだす^{アンテリシブル}可知的な部分を正確に縁取る色彩の可感的差異によつて、われわれは一見しただけで無限の異なる対象、それらの大きさ、形、位置、運動ないし静止を発見するものである。そうしたことをすべてを、生命の維持にとつてはきわめて的確に、しかしまた、きわめて混乱した形できわめて不完全になすのである。というのも、感覚がわれわれに与えられたのは、真理ないし諸対象が相互にもつ関係を、われわれに発見させるためではなく、われわれの身体を維持するため

あり、その身体に有用でありうるすべてのことのためであることを、いつもわれわれは銘記すべきであるのだから。

（『形而上学対話』XII-1、2）

感覚の誤謬

視覚は、あらゆる感覚のうちで第一のもので、もっとも高貴、もっとも広範にわたるものである。したがって、諸感覚が真理を発見するためにわれわれに与えられているのであれば、視覚はそれだけで、その他の感覚すべてをあわせたものより、そうした発見に寄与するであろう。かくして、われわれが過ちに気づくためには、さらに、われわれのもつ全感覚についてあまねく警戒するようになるためには、理性に対する眼の権威を失墜させれば十分であろう。

したがって、われわれは次のように指摘しておこう。事物そのものの真理を判断するために、われわれはわれわれの視覚の証言に基づくべきではなく、ただ、それら事物がわれわれの身体の維持に關してもつ關係を発見するためにのみそうすべきである、と。われわれの眼は、それがわれわれに表象するものすべてにおいて、物体の大きさ、その形と運動、光と様々な色——われわれが見ているのはこうしたものだけであるが——というものにおいて、あまねくわれわれを過たせる、と。また、こうしたすべてのものは、それがわれわれに見える通りに存在しているのではない、すべての人がその点で過っており、そのことがさらに、無限の数の他の誤謬のうちにわれわれを陥れるのである、と。

（『真理探究』第一巻、第六章）

自然学に關して人が陥る主要な過ちの一つは、強く感覚できる物体のうちには、ほとんど感覚できない他の物体よりはるかに多くの実体がある、と思いつくことである。大多数の人間は、金や鉛のうちには空気や水のうちよりもずっと多くの物質がある、と信じ込んでいる。さらに、子供たちにしても、それまで感官によって空気の影響に気づくことがなかったので、それはまったく実在しない、と通常は思い込むものである。

金と鉛とはきわめて重くきわめて堅くきわめて可感的であるが、水と空気とは、逆にほとんど感じられることがない。このことから人々は、前者は後者より……ずっと多くの実在性をもつ、と結論づける。彼らはわれわれをいつも欺く可感的な印象によって事物の真理を判断しており、われわれを決して欺かない、精神の明晰・判明な觀念をないがしろにしている。というのも、可感的なものはわれわれの心に触れ、われわれの注意を引くが、知性の方はわれわれを眠り込ませるからである。

明らかに人は、物質の完全性や純粋性を、その人固有の感官を介してのみ判断している。そこで、すべての人の感官は異なっているのだから、われわれがすでに十分に説明したように、物質の完全性や純粋性は人様々に判断されざるを得ない。かくして、ある種の物体に帰属するものとされる想像上の完全性に関して彼らが毎日作り

上げる書物は、まったく異常で奇妙な多様性に富んだ、必然的に誤謬に満ちたものとなる。それらの書物に納められている推理は、われわれの感官のもたらす偽りで混乱した不規則な諸観念にしか基づいていないのだから。

（『真理探究』第一巻、第十九章）

自然的判断

たとえば、われわれが立方体を見る場合、われわれが見ている立方体のすべての面が、われわれの眼の奥に同じ大きさの投影ないしイマージュを形成するわけではまずない、ということとは確かである。これらの面のそれぞれのイマージュは、網膜ないし視神経に沿って描かれるわけだが、そのイマージュは、遠近法に拠って描かれた立方体ときわめてよく類似しているからである。そこで当然ながら、それについてわれわれの受ける感覚作用は、立方体の各面を、同一ならざるものとしてわれわれに表象するはずである。遠近法に拠る立方体では、それぞれの面は同じではないのだから。しかしながら、われわれはそれらすべてを同じと見るし、見間違えることはない。ところで、われわれが自然になす一種の判断によつて、そうしたことは生じる、すなわち、きわめて遠くにあり、斜めに見られている立方体の面は、より近くにある面と同じ大きさのイマージュを、われわれの眼の奥に形成しているはずはない、と言うことができよう。しかし、感官は感じさせるだけであり、正確に言えば判断することは決してないのだから、この自然的判断は複合的な感覚作用に

他ならない。したがって、それはときおり偽りであることもありうる。私がそれを複合的と言うのは、その感覚作用が、われわれの眼のうちに同時に形成される二つないしそれ以上の印銘に依存しているからである。たとえば、歩いている人間を私が見るとき、彼が私に近づくのに比例して、私の眼の奥に印される彼の身長 of イマージュないし印銘は絶えず増大し、私から十歩のところのいた彼がほんの五歩のところまで来たとすれば、そのイマージュはついに二倍の大きさになる、ということとは確かである。しかし、距離の印銘は、他方の印銘（身長 of 印銘）が増大するのに比例して減少するのであるから、私は彼を相変わず同じ大きさだと見る。かくして、この人物について私の受ける感覚作用は、眼の位置の変化や、これから私が話すつもりでいるその他のことを考慮に入れないとすれば、二つの異なる印銘に変わることなく依存しているのである。

しかしながら、われわれのうちでは感覚作用に他ならないことも、われわれのうちでその感覚作用を刺激する自然の（作者）との関係では、一種の判断と見なされうるので、自然的判断としての感覚作用について私は語ろう。なぜならば、こうした語り方の方が事象の説明に役立つからである。

私の語るこうした判断は、われわれの感官を多数の異なる仕方です正するの役に立ち、その判断がなければわれわれはほとんどいつも過つことになるにしろ、われわれにとって依然として誤謬の機会である。たとえば、高い城壁の背後、ないし山の背後にある鐘楼の

高みをわれわれが見ている、というような場合には、われわれにはそれはかなり近くにあり、かなり小さいものと感じられるであろう。そのあとで、もしそれを同じ距離で見るとしたら、しかもわれわれとそのものとの間にいくつかの土地といくつかの家が介在しているとしたら、間違いなくそれはより遠くに、より大きくわれわれに見えるであろう。いずれの場合も、われわれの眼の奥に描かれる鐘樓の光の投影、ないし鐘樓のイマージュはまったく同一であるにしろ、そうである。ところで、われわれが自然に形成する判断のゆえに、われわれにはそれはより大きく見える、とすることができ。すなわち、われわれと鐘樓との間にたくさん土地があるので、それはより遠くに、したがってより大きくなければならない、と。

逆にもし、われわれの眼と鐘樓との間に土地が見えないとすれば、たとえ他方で、多数の土地がその間にあること、それがきわめて遠くにあることをわれわれが知っているにしても（そうした理解は、それ自体十分に注目値することであるが）、しかしながら、私がさっき言ったように、それはきわめて近くにあり、きわめて小さいものと見えるであろう。そしてそれは、われわれの魂にとって一種の自然的判断によつてなされる、となお考えられうる。なぜなら、それを五百ないし六百歩のところにありと魂は判断しているので、その魂にはそういう風にこの鐘樓が見えるのである。というのも、通常われわれの想像力は、二つの対象の間に見える他の諸対象、さらにはその二つの対象の彼方になおも想像されうる他の諸対象の可感的な視覚によつて補助されていないとすれば、その間により多く

の空間を表象することはないからである。

まさにその故に、月が昇るとき、ないしは月が沈むときには、それが地平線からはるか上空に昇ったときより、われわれにはそれははるかに大きく見えるものである。というのは、月ははるか上空にあるため、それとわれわれとの間に、比較することで月の大きさを判断できるような、その大きさをわれわれが知っている対象がわれわれに見えないからである。しかし、それが昇りだしたとき、ないし沈みかけたときには、月とわれわれとの間に、われわれがほぼその大きさを認識しているいくつもの田畑をわれわれは見る。かくして、われわれはそれをより遠くにあると判断し、そしてそれ故に、その月はより大きく見えてしまう。

そして、次のことを留意すべきである。その月がわれわれの頭上はるかに高く昇っているとき、たとえそれがきわめて遠くの距離にあるのをわれわれが理性によつてきわめて正確に知っているにしても、われわれは依然として、その月をとても近くにありとても小さいものと見てしまうものである。なぜならば、実際こうした視覚の自然的判断は、われわれのうちで、われわれ抜きで、われわれの意向にかかわらずなされるものだからである。

さらに私は、次のことも指摘しておくべきだと信じる。諸対象の距離、大きさなどについての判断を、私がいま説明したばかりの仕方に応じて形成するのは、われわれの魂ではなく、心身結合の法則に従った神である、と。だからこそ、そうした判断がわれわれにお

いて、われわれ抜きで、われわれの意向に反してさえなされることを指摘するために、私はこの種の判断を自然的と呼んだのである。

しかし神はそうしたことを、もしわれわれが光学と幾何学とを、われわれの眼と大脳において現実に生起しているすべてのことを、神のように知っていたとすれば、そしてまた、われわれの魂がそれ自身において行為することができ、自らにその感覚作用を付与しうるとすれば、われわれ自身が形成し得たであろうように、われわれにおいてわれわれのためになすのだから、私は魂に、こうした判断と推理をなすことを、そしてさらに、無限の知性と能力の結果でしかあり得ない諸感覚を魂自身において引き起こすことを帰属させる。したがって、われわれが眼を開けるや、神のみが、われわれを取り巻く諸対象の大きさ、形態、運動、色彩について、瞬時のうちにわれわれに教えるのである。しかし、神はそのことを、ただ諸対象がわれわれの身体に及ぼす印銘に従つてのみなすのだから、こうした印銘についての既知の多様性から、われわれの多様な感覚作用の真理を導き出さねばならない。それは、魂が諸認識とある能力とをもつものと仮定して（魂がそれらをもたないことを、誰もがよく知っており、私もまた、われわれの感覚作用が依存している判断を自然的と名づけることによって、魂はそれをもたないということを、すでに十分に指摘したところであるが）、私がなそうとこれまで努めてきたところである。

（『真理探究』第一巻、第七、第九章）

・マルブランシュの思想的地位

マルブランシュの影響が明白なヴォルテールの文章

《神に対する人間の依存について》

この永遠の存在、この普遍的な原因が、私の観念を私に授ける。というのも、対象がそれを私に与えるのではないからである。自然の物質が、私の頭の中にいろいろな思惟を送り込むことはできない、私の思惟は私から由来するのではない。というのも、私の思惟は、私の意図にかかわらず生じるし、しばしば意図に反し逃げ去ることもある。対象とわれわれの感覚作用との間には、どんな類似性もどんな関係もないことは、周知のところである。われわれはすべてを神そのものにおいて観る、と敢えて主張したあのマルブランシュの中には、何か崇高なものがあつたのは確かである。しかし、われわれのうちで働くのは神であり、われわれは神の実体のある輝きレイオンを所有している、と考えたストア学派の中には、崇高なものがまったくなかったと言うのだろうか？ マルブランシュの夢とストア学派の夢との間のどこに現実はあるのだろうか？ 私の本性の専有物たる無知の中に私は再び落ち込む。そしてなお私は神を賛美する。その神によって私は考えるのだが、どのようにして私が考えるのかは知らないのである。

（ヴォルテール『無知な哲学者』第21章）

《奇蹟について》

……無限の《存在》が、三、四百匹の蟻のために、このわずかばかりの泥の堆積物に対して、全宇宙を動かすこの巨大なぜんまいの永遠の動きに変更を加えると想像するのは、狂気の中でも最も馬鹿げたことではないだろうか？

では、特別の好意によって神が少数の人間を区別しようと望んだ、と想定してみよう。すべての時間にわたり、あらゆる場所に対して自身が確立したものを、神は変化させねばならないのだろうか？ 自らの被造物を優遇するのに、こうした変化、こうした移り気を、確かに神はまったく必要としない。つまり、彼の好意はその法則そのもののうちにある。そうした被造物のために、彼はすべてを予見し、すべてを準備していたのである。あらゆるものは、神が自然のうちに永遠的に刻み込んだ力に、否応なく従うのであるから。

どうして神は奇蹟などを起こすのだろうか？ いくらかの生物に對してある種の計画をやり遂げるために、であろうか？ そうであれば、彼はこう言うことになる。ある種の計画を、宇宙の創造によって、私の神的命令によって、私の永遠の法則によって完遂するにはいたらなかった。私は、私の永遠の観念、私の不変の法則を、それらによつては為し得なかったものの実現をめざして変化させよう、と。これでは神の弱さの告白であつて、決して強さの告白ではないであろう。それは、神における最も不可解な矛盾であるように思われる。こういうわけで、敢えて神による奇蹟を想定するのは、実は神を侮辱することなのである（人間が神を軽蔑できれば、の話では

あるが）。それは神にこう言うことである。あなたは弱く首尾一貫しない存在である、と。したがって、奇蹟を信じるのは馬鹿げたことであり、《神性》をいわば冒瀆することなのである。

（ヴォルテール『哲学辞典』「奇蹟」の項目）

《恩寵について》

……すべての神学者たちは……明敏に間違えた。というのも、彼らはすべて、明らかに誤った原則に従つて推理したからである。彼らは、神は特殊的な方法によって働きかける、と想定した。ところで、永遠なる神は、一般的で不変的で永遠的な法則を伴っていないければ、観念的存在であり、亡霊であり、寓話の神である……。

普遍的な神学者、すなわち真の哲学者は、自然が最も単純な方法によつて作用しないのであれば矛盾している、と見なしている……。

万物の絶対的な支配者が、ただ一人の人間の内面の指導に努めるあまり、それ以外の全自然の管理を疎かにする、などということがあつたらうか？ どんな気紛れで、すべての星に課した諸法則には何の変更改も加えないのに一人のクールランド人とかビスケー人の心には何らかの変化をもたらす、と言うのだろうか？

神は、われわれの感情を形成し・取りこわし・また作るということとを終わりに繰り返す、と想定するのであれば、何と哀れなことだろうか！ また、われわれが全存在の中で例外的な存在であると信じるのであれば、何という厚かましさであろうか！

（ヴォルテール『哲学辞典』「恩寵」の項目）

《意志の唯一の動因としての快樂について》

自然は、あなたの欲求を満たすことに配慮し、快樂の聲によってあの神へとあなたを招く。誰もまだその善意の全体を讃えてはいない。ただ運動のみで神は物質を導く。

しかし、彼が人間たちを導くのは快樂による。

少なくとも、神の手によって惜しみなく授けられる恵みを感じ取るように……

いたるところで、寛大なる神の有益なる善意が、

あなたの欲求に、必要な快樂を結びつける。

一言で言えば、死すべきものはそれ以外の動因をもたない。

(ヴォルテール『人間についての詩的論文』『第五論文』)

マルブランシュの影響が明白なエルヴェシウスの文章

《物体の存在の証明不可能性について》

本当に服するのは明証性のみ、というのであれば、誰にしても確信がもてるのは、自分自身の存在ぐらいであろう。たとえば、物体の存在について、どうして確信がもてるというのだろうか？ 神は、その全能によって、われわれの感官に対して、対象の現前がそこに引き起こすのと同じ印象を生み出すことができないだろうか？ ところで、もし神がそうできるのであれば、このことに関して神がその能力を活用しないなどと、どうして確信できるだろうか？……

ここで私は物体の存在を否定しようというのではなく、ただわれわれはそれについて、自分自身の存在ほどには確信がもてない、ということを描きたいだけである。ところで、真理とは分割不可能な論点であり、一つの真理について、それは多少とも正しい、などとは言えないのであるから、われわれが物体の存在以上に自分自身の存在を確信しているのであれば、物体の存在は、それ故、一つの蓋然性に他ならない、ということは明白である。なるほどそれは、きわめて高い蓋然性であり、行動においては明証性に等しいものであるが、やはり蓋然性でしかないのである。

(エルヴェシウス『精神について』第一話、第一章、註e)

《快樂の役割について》

物理的宇宙と同様に精神的宇宙にも、過去に生じたもののすべてにわたって、神は唯一の原理しか置かなかつたように思われる。現にあるものやこれから生じるものは、その必然的な発展に過ぎない。彼は物質に言った。私はおまえに力を授ける……、と。

同様に人間にも彼はこう言ったように思われる。私はおまえに感受性を授ける。その感受性によって、私の意志の盲目的道具であり、私の意図の深みを認識できないおまえは、私の全計画を、自覚することなく実現しなければならないのである。私はおまえを快樂と苦痛の監視下に置く。この二つのものがおまえの考え、おまえの行動を見張るであろうし、おまえの情念を生み出し、おまえの嫌悪・友情・愛情・怒りを刺激するであろう。おまえの欲望・恐れ・希望に

火をつけるだろう。おまえに真理を開示し、おまえを誤謬に陥れるであろう。そして、不条理で道徳と法律とに反する幾多の体系をおまえに生み出させたのちに、ある日おまえに、単純な諸原理を見せるであろう。そうした諸原理の発展に、精神的世界の秩序と幸福とは結びついているのである。

（エルヴェシウス『精神について』第三話、第九章）

マルブランシュの影響が認められるモンテスキューの文章

……すべての存在にはその法があり、神には神の法があり、物質的世界には物質的世界の法があり、人間より優れた知的存在には知的存在の法があり、動物には動物の法があり、人間には人間の法がある。

世界の中でわれわれに見えるあらゆる結果は盲目的な宿命が産出したものだ、と言った者たちは、大変不条理なことを語ったのである。……したがって、原初的な理由が存在し、法とは、その理由とさまざまな存在との間に認められる関係のことであり、また、それら諸存在相互の関係のことである。

神は宇宙に対して、創造者および管理者として関係をもっている。神が〔宇宙を〕創造した際に従った法は、〔それを〕保存する際に従う法である。神がこうした規則に従って働きかけるのは、彼がそれらを知っているからである。神がそれらを知っているのは、彼がそれらを造ったからである。彼がそれらを造ったのは、それらの規則

が神の叡知と力とに関係があるからである。……

こうして、恣意的な行為に見える創造も、無神論者の説く宿命と同じくらい不変の規則を前提にしている。創造者がこうした規則なしで世界を統治しようと言うのは、それなしでは世界は存続しえないのであるから、不条理というものである。

こうした規則は、恒常的に定められた関係である。ある運動体と他の運動体との間では、あらゆる運動は質量と速度との関係に従って受け取られ、増大し、減少し、失われるのである。どんな多様性も斉一的であり、どんな変化も恒常的である。

個々の知的存在は、彼らが作った法をもつことができるが、作ることのなかった法もまたもっている。知的存在は、出現する前から可能的であった。したがって可能的な関係をもっていたし、それ故、可能的な法をもっていたのである。法が作られる以前から、正義の可能的な関係は存在していた。実定法が命じたり禁じたりするもの以外に正義も不正もない、と言うことはつまり、円が描かれる以前にはすべての半径は等しくなかった、と言うようなものである。

したがって、それを定める実定法に先行して、公平の関係が存在することを認めねばならない。それは、たとえば次のようなものである。人間社会があるとすれば、それらの社会の法に従うことが正義にかなうことであるだろう。他の存在から何らかの好意を受けた知的存在がいるとすれば、彼らはその存在に感謝の念をもつべきであらう。もしある知的存在が他の知的存在を創造したとすれば、その創造された存在の方は、そのはじまり以来負っている依存関係の

うちにとどまるべきであろう。他の知的存在に悪事をなした知的存在は、同じ悪事を受けるにふさわしい、等々。

しかし、知的世界は物的世界のようにうまく統治されている、とはとても言えない。というのも、知的世界も、本性的に不変であるような法をもつにしろ、物的世界がその法に従うように、それに恒常的に従うということはないからである。

(モンテスキュー『法の精神』Ⅰ、1)

メリエ神父により改変されたマルブランシュの存在論的論証

「無限に完全な物体の観念は、(と『真理探究』の同じ著者は言う、)もし、文字通りそうであれば、偽りか矛盾であるような複合的観念である」。この観念が複合的なものであること、それが偽りであること、そして、無限に完全な物体などありえないということについて、私は彼に同意する。しかしまた、無限な完全性という観念は精神による虚構に他ならないのだから、物体以外でも無限に完全な存在などないことを認めるべきである。……

「しかし、神の観念、(と彼は言う、)あるいは、〈存在〉一般、制限のない〈存在〉、無限の〈存在〉の観念は、精神による虚構ではない。それはなんらかの矛盾を含む複合的観念では決してない。たとえその観念が、存在するものすべてと存在しうるものすべてとを含むにしろ、それ以上に単純なものはない。ところで、(と彼は付け加える、)〈存在〉ないし無限なるもののこの単純な観念は、必然的

現^{エグジステン}存を含む。というのも、(と彼はさらに続ける、)存在は——これはしかじかの個別的存在のことを言っているのではない」(このことに十分注意すること)「——自身によってその現存を保持していること、および、真の存在が現存を伴っていないのは不可能であり矛盾しているから、存在は現実存在しないことはできないということ、以上のことが明白であるからである」。『真理探究』の著者によるこの後半部分の推理はすべて、きわめて正しいものである。

しかし、この著者の策略ないし大きな誤解にご注意願いたい。このように私は語らねばならない。というのも、ここで彼は、意図的にか不注意によってかはともかく、存在一般、制限のない存在、無限の存在と、無限に完全な〈存在〉とを混同しており、存在一般と無限の存在との現実的で必然的な現存から無限に完全な〈存在〉の現実的で必然的な現存を、かなり巧妙に結論づける。まるでそれが、両者にとつてただ一つのものでしかないかのように……。

存在一般にして制限のない存在、ないしは無限の存在、それは物質ないし延長に他ならない。……

物質、あるいは、少なくとも延長が存在すること、しかも、その延長は必然的に存在すること、さらに、その延長は、全体としては無限であることさえも、恒常的なことであり、明晰で、明証的なことなのである。というのも、その延長について考えるとき、延長がまったく存在しないことを想像するのは、可能ではないからである。なぜなら、その延長になんらかの終わらないし限界を、たとえどんな場所に指摘ないし想定するにしても、必然的に、そのいわゆる限

界の彼方を想像することができ、したがって、無限の延長が……存在する、ということになるからである。……

かようにして、われわれの著者が言うように、物質の観念のうち、あるいは延長の観念のうちに、存在一般、制限のない存在、無限の存在の現実的で必然的な現存が観られるし、明証的に理解されもする。さらに、この存在の単純で自然な観念が存在するものすべてを包み込む、と彼が語るのには正しかった。……この〈存在〉の観念が必然的な現存を含むということ、そして、この〈存在〉はそれ自身によって自身の現存をもつ、と彼が語るのには正しかった。……しかし、そこから彼が、無限に完全な〈存在〉の現存を結論づけるのは、正しくはなかった。実際に真実に無限であるような物質つまり延長という明晰で自然な観念と、どこにも見いだせず、どこにも存在せず、もともと存在していないような無限に完全な〈存在〉という空想的観念との間には、いかなる必然的関連もないのであるから……。

(ジャン・メリエ『論文』^{ジュニアル}第81章)

ドルバック男爵により再度取り上げられ反駁されたマルブランシュの論証

……動物はまったく感覚することがない、ということを実証するためのこの論証に、一般の人々がいつか納得するとは期待できない。つまり、万人が同意し私もまたそう想定するのだが、動物は罪とは無縁であるのだから、もし動物にとって感覚が可能であるとなれば、

無限に正しく全能の神のもつて、罪とは無縁の被造物が、痛みでありなんらかの罪の報いである苦しみを受けている、ということになるだろう。通常人々は、次の公理の明証性を見て取ることができないものである。正しい神ノモト、何人モ不当ニ不幸ニナルコトハアリエナイ (sub justo Deo, quisquam nisi mereatur miser esse non potest)。聖アウグスティヌスは、ユリアヌスの反駁に向けて、原罪とわれわれの本性の腐敗とを証明するために、しごく当然のことではあるが、この公理を活用している。人々は、この公理の中にはいかなる力もいかなる強固さもない、と思ひ込み、さらに、動物は感覚することがないことを証明する他のどんな公理の中にも、そうした力、そうした強固さはない、と思ひ込む。

(マルブランシュ『真理探求』第四卷、第十一章、第三節、全集、第二卷、p. 104)

人間はその虚栄心から、人間が〈宇宙〉の唯一の中心である……と納得しているのだが、人間以外の動物のことが問題となるや、すぐさま彼は無神論者として推理する。自分とは異なる種の個体は、普遍的な〈摂理〉による配慮にほとんど値しない自動機械であり、動物たちは人間の正義ないし好意の対象とはなりえない、と彼は思ひ込んではいないだろうか？……正しい神のもとに、動物たちが、彼ら人間たちと同様に、楽しんだり苦しんだりし、健康であったり病気であったり、生きたり死んだりするのを見るにしろ、彼らは、この動物たちが自然の支配者の不興をこうむったのはいかなる罪に

よってだろうか、と疑問に感ずるようなことはない。自分の神学的な偏見によって盲目にされた哲学者たちは、疑問から抜け出すために、動物は感覚することがないと主張するまでに、その狂気を極端なものにしなければならぬか？

(ティリー・ドルバック男爵『良識』第99章)

ルナンのマルブランシュ哲学

初期の時代に見られるこれらの奇妙な産物や、〈宇宙〉の通常の秩序の外部にあるように思えるこれらの事実を見ると、そこに特殊な法則を、現在では使用されていない特殊な法則をわれわれは想定したくなるであろう。しかし、今日世界を支配しているのも、その形成をつかさどったのも、同じ法則なのである。……しかし、一つの同じ体系によって、かくも多様な結果をどう説明できるというのだろうか？ その起源を告げていたこれらの奇妙な事実は、それらをもたらしただけがなお存続しているのに、どうして今では再び生み出されないのだろうか？ それは、状況が同じではないからである。つまり、こうした偉大な現象へとその法則を決定していた機会原因が、もう存在していないのである。

……〈自然〉の中には一時的な支配などない。今日世界を支配しているのも、その形成をつかさどったのも、同じ法則なのであり、……これらの法則にその行為を則らせる上位の作用因は、諸事物のメカニズムを特別に志向する意志を介在させることは決してなかつ

たのである。なるほど、すべては第一原因によって形成されるのだが、その第一原因は、マルブランシュも言っているように、部分的な動機によつては、特殊な原因によつては作用しないのである。

(ルナン『科学の将来』pp. 169, 170)